本稿と同一のテーマで『林巨樹先生古稀記念甲戌論集』に執筆掲載したが，対象地域が違うので，本稿をあえて（二）としなかった。

図一の〔A〕が龍郷町嘉渡（大島本島北部），〔B〕が瀬戸内町請阿室（大島本島南部の属島である請島）を示している。

2） 木崎甲子郎・目崎茂和『琉球の風水土』（築地書館　1984年11月　242～243頁）

3） 西村進「インドネシア諸島動き，赤道海流曲げた。新説黒潮誕生1600万年前」（『朝日新聞』1992年7月29日）

4） 昇曙夢『大奄美史』（奄美社　昭和24年12月　20頁）

5）『日本書紀下』（『日本古典文学大系38』岩波書店　昭和40年7月　330頁）

6） 注5）（575～576頁）

7） 注5）（452頁）

8） 注5）（322頁）

9）「奄美にもいた『大阿母』島の御印加那志と同一」「古文書の解読で判明・古琉球の支配体制鮮明に」（『南海日日新聞』昭和53年9月17日）

10） 平山輝男『琉球方言の総合的研究』「琉球方言区画（第1図）」（明治書院　昭和41年3月）

11）『古事記大成6』「古事記上巻并序」（平凡社　昭和32年10月　38～39頁）

12） 喜名・伊波・森・高橋共訳「ベッテルハイム琉球語と日本語の文法の要綱（1）」『南島文化第1』（『沖縄国際大学南島文化研究所紀要』1980年3月　47頁）

13）『続日本紀巻第六』「天明天皇和銅6年5月」（『新日本文学大系』岩波書店　昭和60年3月　197～199頁）

14）『林巨樹先生古稀記念甲戌論集』（武蔵野書院　平成8年6月　10～11頁）

15） 岩間政明『知名町地名考』「沖永良部島南西の名勝史話」（八重岳書房　1989年4月　14～15頁）

16） 松元勇喜「嘉渡シマの位置と景観」『龍郷町誌　民俗編』（龍郷町教育委員会　昭和63年11月　161～162頁）

あ と が き

本稿をまとめるに当たって，多くの文献と島の古老の方々，特には下記に記する方々から，貴重な資料と素材とご厚情をいただいた。ここに記して謝意をあらたにする。

龍郷町嘉渡の地名調査には，嘉渡出身・名瀬在住の奄美郷土史研究家松元勇喜氏・公子ご夫妻と龍郷町役場ご勤務の西田栄三郎氏。

瀬戸内町請阿室の地名調査には，請阿室在住の篤農家大里正三氏・永子氏ご夫妻と瀬戸内町教育委員会ご勤務の渡甚英氏方のご協力・ご助言によってなされたものである。

引用文献は，注記して謝意に代えるが，まとめに当たって，本学大学院卒業生の飯田修君のご協力を得たことを，ここに記して謝意をあらたにする。

本文の※印の地名は，複数の語形が現れた不安定な語形である。

る。

（クウモリヤ）は「隠る」であって，生物の再生・脱皮に関わる神聖な場所・生命誕生の〔ku mu rja〕の意味がある。隣の部落の〔ʔu kï ɤ〕にも〔ko mo n zja〕という神が宿る所がある。

「嘉渡」には，「カンミチ」が「ノロ神」の通る道として昔はあったとされるが，現代では跡かたもない。しかし，海岸から百米ぐらいの沖合に，「ヒジャゴモリ」「フジカマゴモリ」（トビスゴモリ）「フーゴモリ」「エーゴモリ」という名の付く所がある。そこはそれぞれ特色のある貴重な生物の住処だという。これらは海の向こうからニナイカナイがやってくるという古代シャーマニズムの名残りであり，上代語の「隠る・隠り」に連がる民俗学的意義が存在するといえよう。

Ⅳ

日本の本土ではとうの昔に消え失せて，今ではその面影さえも残っていないといわれている，貴重な日本古代の言語・習俗・行事が，奄美大島，特に奄美南部に，今もなお生きている。

日本本土とは大海によって，しかも季節によっては荒れ狂う海によって遮られた，四面海に囲まれた孤立不便な環境が，貴重な存在である上代文化を，原始的形態のまま保存していることを郷土の誇りであると，近代文明の恩恵に浴することの薄く，かつ遅かったことも忘れて，己れを慰めているのがこの島の人達である。日本本土もそうであるように，最近数十年間の交通，マス・コミ，情報伝達の機械器具の発達と，それに引きずられている世相・生活主体の喪失，それによってその風土特有の文化・言語が，衰滅の一途をたどっている。文字を持たず記録を否定された島民達の，ただ口承文芸として，しかもそれが高齢者によってのみ語り継がれている言語文化は，それを保持している人々の他界とともに急速に失われつつあるのが，奄美大島方言の地名呼称語形の古層である。

「重く尊い標準語，軽く卑しい方言」といわれてきた時代思潮の影と，さらには音声言語の宿命的本質もからまって，この地の方言語音の衰滅は甚だしい。

（注）

1） 大島支庁総務課編『平成７年度　奄美群島の概況』（平成８年３月　５～49頁）本稿の数字は本書に負うところが大きい。

図一の◉印は，奄美大島諸島全域の，現在の各市町村役場の所在地を示している。

図一の●印は，言語の外的要因によって，地名古層呼称がくずれつつある地名―本稿で説明した地点名―を示している。

22 「ミナンダ原」（ミナンダ）〔mi na n da〕 大里氏の説明によると，21番の「親田原」と22番の「ミナンダ原」を総称して（ミニャンダ）というと言われた。

23 「コンマ原」（コンマ）〔ko n ma〕

24 「嘉シヤ原」（カミヤ）〔ka mja ɤ〕（シはミの誤記）

25 「ナミケ原」（ナミケ）〔na mi ke〕

26 「久地ヤマ原」（クツジヤマ）〔ʔku q zja ma〕

27 「親トマリ原」（ウヤドゥマリ）〔ʔu ja du ma rï〕

28 「石川原」（イシキヨ）〔ʔi sji ʔkjo〕

29 「赤辻原」（※アートウチ）〔ʔa ɤ tu tʃi〕

30 「オリ佐原・宇シ作原」（ウッセュク）〔ʔu q sje ˬ k〕

31 「間茶ブ原」（マチャプ）〔ma tʃa ˬ p〕

32 「東風原」（トウバル）〔tu ɤ ba ru〕

33 「ワタン作」（ワタンサワラ）〔wa ta n sa wa ra〕

34 「クミヤシノ下原」（クミヤシヌシヤ）〔ku mi ja sji nu sja ɤ〕

35 「アテナマ原」（アディナマ）〔ʔa dï na ma〕

36 図四の無記入は，大里氏の説明では，土地所有者の名儀人が2人になっている。ここの地名は（差ラギ原・サシラギバル）〔sa sji ra gi ba ru〕であると言われた。

37 「ワンメ原」（ウハンミイ）〔ʔu ha n mi〕

38 「タカマ原」（タガマ）〔ta ga ma〕

39 「クラデ原」（クラデ）〔ku ra dï〕

40 「東原」（ヒギャー）〔hi gja ɤ〕

41 「宇シロ原」この地名を大里氏は村の裏，後（ウシロ）を指しているといわれ，ここは（オービリヤ）〔ʔo ɤ bi rja〕ともいう，と言われた。

「阿室」という地名は，瀬戸内町の西北に隣接する宇検村に「阿室」，瀬戸内町内の旧西方村に「阿室釜」，同じく瀬戸内町内の旧実久村に「西阿室」そして請島の「請阿室」がある。

請阿室の小字名18番の「コンモリヤ原」は，（クウモリヤ）というとあるが，ここは集落のほぼ中心に位置する。東側と南側が小高い丘によって囲まれ，西側と北側が，この集落にあっては最も幅の広い川〔naɤ goɤ〕（川幅4～5m）に囲まれている。周囲もうっそうとした老大木と城壁のように大きな，立派な石垣で囲まれ，邸内には立派な建物が建っている。この家と屋敷は昔の栄華を物語っている。ここは請阿室集落発生の地，最初の集落開拓者の地であるといわれてい

住）のご厚情によって得た資料である。この資料を基にして，請阿室在住篤農家の大里正三氏（1924年生）にご教示いただいた語形を中心にして示すことにする。

図四の番号に従って記入し，それを大里正三氏ならびに〔ʔa mo ro〕の島の人達と渡甚英氏方がどう呼んでおられるか，その呼称を片仮名で，それを私が聴いた語音を，音声記号で示すことにする。

1 「阿室崎原」（マサラ），または年輩者は（ハチジャ）〔ma sa ra • ha tʃi zja〕ここは隣りの集落〔ʔu kï〕（池地）（請島には，池地と請阿室しかない）との東西の境界に当り，〔ʔu kï〕では〔ʔa mo n da ▾ k〕（阿室崎）と言っている。

2 「興人コンマ原」（ユツチョグンマ）〔ju q tʃo gu n ma〕地名の漢字「興」は「与」の誤字であることを，大里氏も指摘された。「与人」は〔ju q tʃu〕である。

3 「ワキン原」（ワキン）〔wa ki n〕

4 「金久原」（カネク）〔ka nï ▾ k〕または（ウサトブラリイ）〔ʔu sa to bu ra rï〕

5 「城亦原」（ウスコマタ）〔ʔu su ko ma ta〕

6 「上大里原」（ウィウサト）〔ʔu i ʔu sa to〕 大里（上大里・仲大里も含めて）に住んでいる人達を〔ʔu sa to q tʃu〕とか〔ʔu q sa to tʃu〕と呼んでいる。

7 「長サギ原」（ナガサバナ）〔na ga sa ba na〕

8 「仲大里原」（ウサト）〔ʔu sa to〕

9 「セマシ原」（セマシ）〔sje ma sji〕

10 「村内」（ムラウチ）〔mu ra ʔu tʃi〕

11 「前田原」（メェィタブクロ）〔më ɤ ta bu ku ro〕

12 「アゲン作原」（アギンサク）〔ʔa gi n sa ▾ k〕

13 「仲川内原」（イキダ）〔ʔi ki da〕

14 「上川内原」（コーチ）〔ko ɤ tʃi〕

15 「崎原」（サク）〔sa ku〕

16 「ヲシ作久」（ウシザク）〔ʔu sji za ku〕

17 「下川内原」（クゥモリヤブクロ）〔ku mu rja bu ku ro〕

18 「コンモリヤ原」（クゥモリヤ）〔ku mu rja〕

19 「山田原」（ヤマダ）〔ja ma da〕

20 「石川道原」（イシキョミチ）〔ʔi sji kjo mi ɤ tʃi〕

21 「親田原」（ウヤダ）〔ʔu ja da〕

地を手離してしまったことから「売田」〔u ri ta〕が〔u q ta〕になり，この語音に宛てた「宇津田」が小字地名として残っている，といわれた。

また，38番目の「赤籠花」の小字名は，昔武士が争いをおこし，相手をこのコモリで切り落した為に，その血が真っ赤に染まったことから〔a ka go mo ri〕の〔a ka〕の〔k〕がこの地域の方言では〔h〕に変化する（音声学上のkがhに変化する現象はこの方言の特色である）ので，〔a ka〕は〔a ha〕となって，さらに語頭の母音〔a〕が脱落して，〔ha ɤ go mo ri〕となり，〔ha〕は「先」を意味する〔ha na〕で，この〔ha ɤ ko mo ri ba na〕すなわち「赤籠花」という熟語形（「赤籠花」は赤籠岬の意味であるかもしれない）として宛てられたと考えられる。

また，39番の「片平」は「上・下」の小字名と複数の小字名に使用されているが，その中核となっている〔ka te ri ja〕は〔ka n te ri ja ma〕で「神が照らしてくれる山」で，本来的には「神照山」である。この地の周辺は，昔から聖地として信仰され，部落の祭事を執り行なう場所であったといわれている。日の照り方が，時刻によって当る場所，すなわち平地が片方ずつであるという意味なのかもしれない。記紀歌謡の世界を想い出させる。この地のノロ（祝女）神様と関わりはないであろうか，この地域は『大阿母加那志』の勢力圏である。興味をそそるものがある。

「嘉」を語頭に持つ大字名で，奄美大島諸島には5箇所ある。関わりがあるのであろう。

嘉渡の小字名22の「宗津折口」は〔u tsu ɤ wï rï gu tʃi〕というから「宗津」ではなく「宇津」であろう。49の「中尾節」も「中尾筋」の誤記であろう。

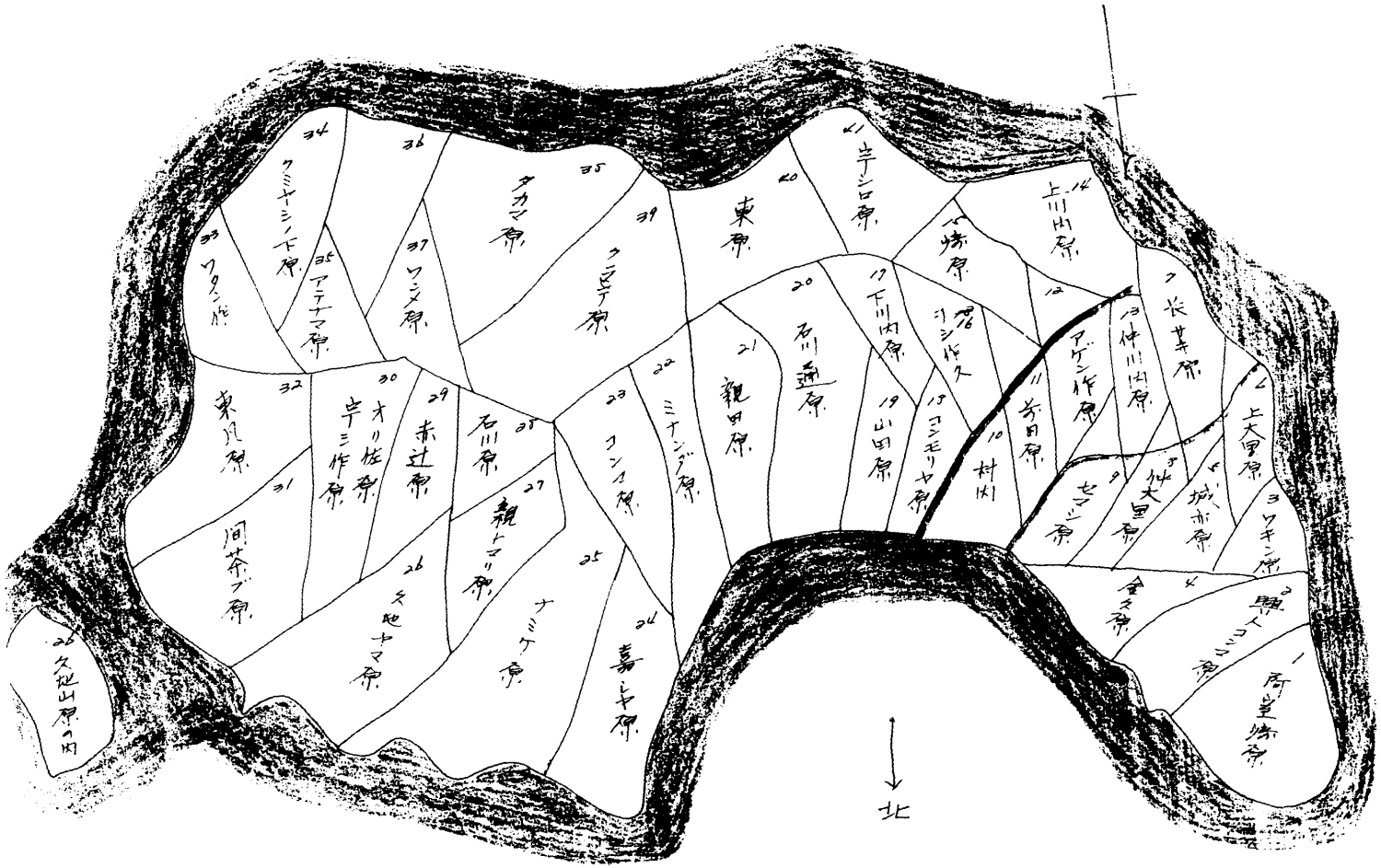
B　図四が請阿室集落の全図である。共通語形では〔u ke a mo ro〕と呼称されているが，島民は〔ʔa mo ro〕と言っている。

〔ʔa mo ro〕は，図一のBに位置し，東経129度12分24秒から129度15分18秒，北緯28度0分から28度3分に位置する，請島〔ʔu kï ɤ〕の東部を占めている集落である。

〔ʔu kï ɤ〕は，周囲24.8粁，面積13.7平方粁，奄美大島本島南部に属する小島で，同じ本島南部の属島，加計呂麻島と徳之島の間に位置し，奄美大島諸島で最も小さな島，与路島と仲良く浮いた2番目に小さな，四面海に囲まれた絶海の孤島である。この小島の半分が〔ʔa mo ro〕の集落である。

人口は，昭和30年が599人，世帯数140，昭和60年が172人，世帯数74，平成2年が154人，世帯数67，平成7年が136人，世帯数67という人口過疎の集落である。

図四の「請阿室全図」は，瀬戸内町教育委員会総務課長　渡　甚英氏（請阿室出身・古仁屋在



図四　請阿室全図

「宇津」（ウツー）〔u tsuɤ〕 11「上川原」（ウンコバラ）〔u n ko ba ra〕 12「城川」（グスンゴ）〔gu su n go〕 13「里」（サト）〔sa to〕 14「中金久」（ナーガネク）〔naɤ ga nï ˬ k〕 15「浜当り」（ハマタリ）〔ha ma ta ri〕 16「金久」（カネク）〔ka nï ˬ k〕 17「宮久田」（※ミヤクタ）〔mja ku ta〕 18「縁」（ウエン）〔ʔu e n〕 19「高二田」（タカンダ）〔ta ka n da〕 20「下福地」（シャーフクジ）〔sjaɤ hu ku zji〕 21「上福地」（ウーフクジ）〔ʔuɤ hu ku zi〕 22「宗津折口」（ウツーヲレグチ）〔ʔu tsu ɤ wï rï gu tʃi〕 23「宇津田」（ウツダ）〔ʔu tsu da〕 24「宇ヒ」（※ウヒ）〔u hi〕 25「馬瀬」（マゼ）〔ma zje〕 26「上万作」（ウーマンザク）〔u ɤ ma n za ku〕 27「下万作」（シャーマンザク）〔sja ɤ ma n za ku〕 28「小俣」（クマタ）〔ku ma ta〕 29「上犬フタ」（※ウーウシタ）〔wï u sji ta〕 30「下犬フタ」（※シャーウシタ）〔sjaɤʔu sji ta〕 31「小前勝」（コムェカチ）〔ko më ka tʃi〕 32「下前勝」（シャーコムェガチ）〔sja ɤ ko më ga tʃi〕 33「キシノマシ」（キシヌマシ）〔ki sji nu ma sji〕 34「セリダ」（セリダ）〔sje ri da〕 35「小勝」（コガチ）〔ko ga tʃi〕 36「上中田」（ウーナーダ）〔u ɤ na ɤ da〕 37「中田」（ナーダ）〔na ɤ da〕 38「赤籠花」（ハーゴモリハナ）〔ha ɤ go mo ri ha na〕 39「上片平」（ウーカテリャ）〔u ɤ ka te rja〕 40「源廻し」（ギンマワーシ）〔gi n ma wa ɤ sji〕 41「下片平」（シャーカテリャ）〔sja ɤ ka te rja〕 42「下片平亦」（シャーカテリャマタ）〔sja ɤ ka te rja ma ta〕 43「上片平」（ウーカテリャ）〔u ɤ ka te rja〕 44「中田平」（ナーダビラ）〔na ɤ da bi ra〕 45「大ケタケ」（ウーギダケ）〔u ɤ gi da ke〕 46「上城田」（ウーグスンダ）〔u ɤ gu su n da〕 47「上棚」（ウンタナ）〔u n ta na〕 48「大廣」（フビロ）〔Fu bi ro〕 49「中尾節」（※ナヲスジ）〔na wo su zi〕 50「小勝亦」（コガチマタ）〔ko ga tʃi ma ta〕 51「小前勝平」（コモガチビラ）〔ko mo ga tʃi bi ra〕 52「大蓋平」（ウシタビラ）〔u sji ta bi ra〕 53「小俣平」（コマタビラ）〔ko ma ta bi ra〕 54「モビラ」（モビラ）〔mo bi ra〕 55「井マキ」（ヰマキ）〔wi ma ki〕 56「本井マキ」（フンユマキ）〔Fu n ju ma ki〕 57「馬瀬平」（マゼビラ）〔ma zje bi ra〕 58「恩節」（ウンブシ）〔u n bu sji〕 59「高野」（タノ）〔ta no〕 60「川内南川」（コーチナンゴ）〔ko ɤ tʃi na n go〕 61「石花」（イシバナ）〔i sji ba na〕 62「山田」（ヤマンダ）〔ja ma n da〕 63「ウツキ田」（ウツタヒリャ）〔u q ta hi rja〕 64「宗津」（シュツウ）〔sju q tsu ɤ〕 65「キシ道」（※キシヌマシ）〔ki sji nu ma sji〕 66「前平」（ムェビラ）〔më ɤ bi ra〕。

以上の小字地名が存在するが，その由来について説明出来るのは，ごく僅かの地名である。例えば23番の「宇津田」は，良質の砂糖のできる場所として知られている所で，昔この一帯を所有していた一族は，正直者ぞろいで，これに目をつけた者が，上司と悪だくみを諮り，その悪だくみにまんまと引っかかって，一族の者達はとうとうその土地を売らねばならなくなって，この土

はまゆうの花，アザミの花などが咲き乱れていた。アダンの林の内側のフウミチの西側には，三十有余の高倉が三列に整然として立ち並び，フウミチの東側には共同墓地がある。現在でもアダンの防風林の一部は残っている。ブレグラはシマの中央を南から北に連なる道があり，この道の海岸のすぐ近くには広場があって，この西側に三列に建っている。シマの人たちは，他のシマでは見ることのできないブレグラをシマの誇りと思っていた。第二次世界大戦中，米軍機は軍の食糧倉庫と間違い爆撃され，すっかり焼かれてしまった。広場の海岸の方には，フーブネを入れる長い小屋があって，昭和四年ごろまでは，名瀬にフーブネで，買い出しにいったこともあった。共同墓地はフウミチの東側にあり，墓地の中には，大きな榕樹（カジュマル）の木が現在も茂っている。筆者が幼いころに，死んだ猫をイビラクに入れてつるしてあるのを，よく見かけた覚えがある。古老の話では，猫は天から神の使いで，地上におりて来た動物だから，木につるして，魂が天に昇りやすいようにするという。犬やネズミなどは，海から来た動物だから，川に流すか地中に埋めて霊を慰めるという」

人口と世帯数　昭和30年には526人，世帯数が131戸だったのが，昭和50年には359人，世帯数121戸，平成２年度には266人，世帯数116戸，平成７年には266人と変わらず，世帯数は117戸と１家族が増えている。

昭和30年からすると約半数の人口数ではあるが，平成２年と比較すると減ってはいない。他の奄美大島各集落―都市的集落地域を除く―と比較して，過疎化現象は少ない。この地域の豊かさと，町政施策の明かるさを示すものである。

以下，「嘉渡字図」の集落名―小字名―の地名呼称の古層を示すことにする。

嘉渡字図は，龍郷町役場商工観光室係長　西田栄三郎氏のご厚情によるものである。

小字集落の古形呼称―現代現地での呼称語形―は，松元勇喜氏（1917年生）のご厚情によるものである。

記載の順序は，字図に記されている順位で，字図の記入語形そのままを引用し，これに対する松元氏の教示方言語形を，片仮名で示し，それを私が調査した語形語音を，音声記号で示すことにする。なお，字図では順番を漢数字で示しているが，ここでは算用数字に置き替えて羅列することにした。

1「中番川」（ナバンゴ）〔na ba n go ɤ〕　2「ワレノヒダ」（ワレンヒジャ）〔wa re n çi zja〕　3「配置」（ホーチ）〔Fo ɤ tʃi〕　4「頼理之腰」（セレングシ）〔sje re n gu sji〕　5「南京」（※ナンギョウ）〔na n gjo〕　6「上南京」（ウーナンギョウ）〔wiɤ na n gjo〕　7「夫野地」（フノチ）〔hu no tʃi〕　8「半川平」（ハンガビラ）〔ha n na bi ra〕　9「瀬理」（セレバラ）〔sje re ba ra〕　10

「ユシキヤ」ともいうとある。

「タンニヤ」は「田皆」となり，「バーヌシマ」が「正名」，「フチカヌ」は「大津勘」，「ヨーム」は「屋子母」となっている。このように「外部からの圧力」によって，古語形，すなわち「呼称の古層」が崩れてしまうのである。また，「シマジー」と呼んでいた「島尻」が，「クンジャー」「国頭」という地名（島の北部，島を人体にたとえた命名）に対する「島の尻」すなわち「人の尻」の連想になるので，これを嫌い，「住みよい」という語形の持つ縁起から「住吉」といわれるようになった。

加計呂麻島の〔nu m sja n〕も「野見山」，〔ka tʃo ho〕が「勝能」，〔sju ɤ ha ɤ tsɥ〕が「諸数」，〔ʔa ki tʃo〕が「秋徳」，〔sa zjo ɤ〕が「佐知克」となる。

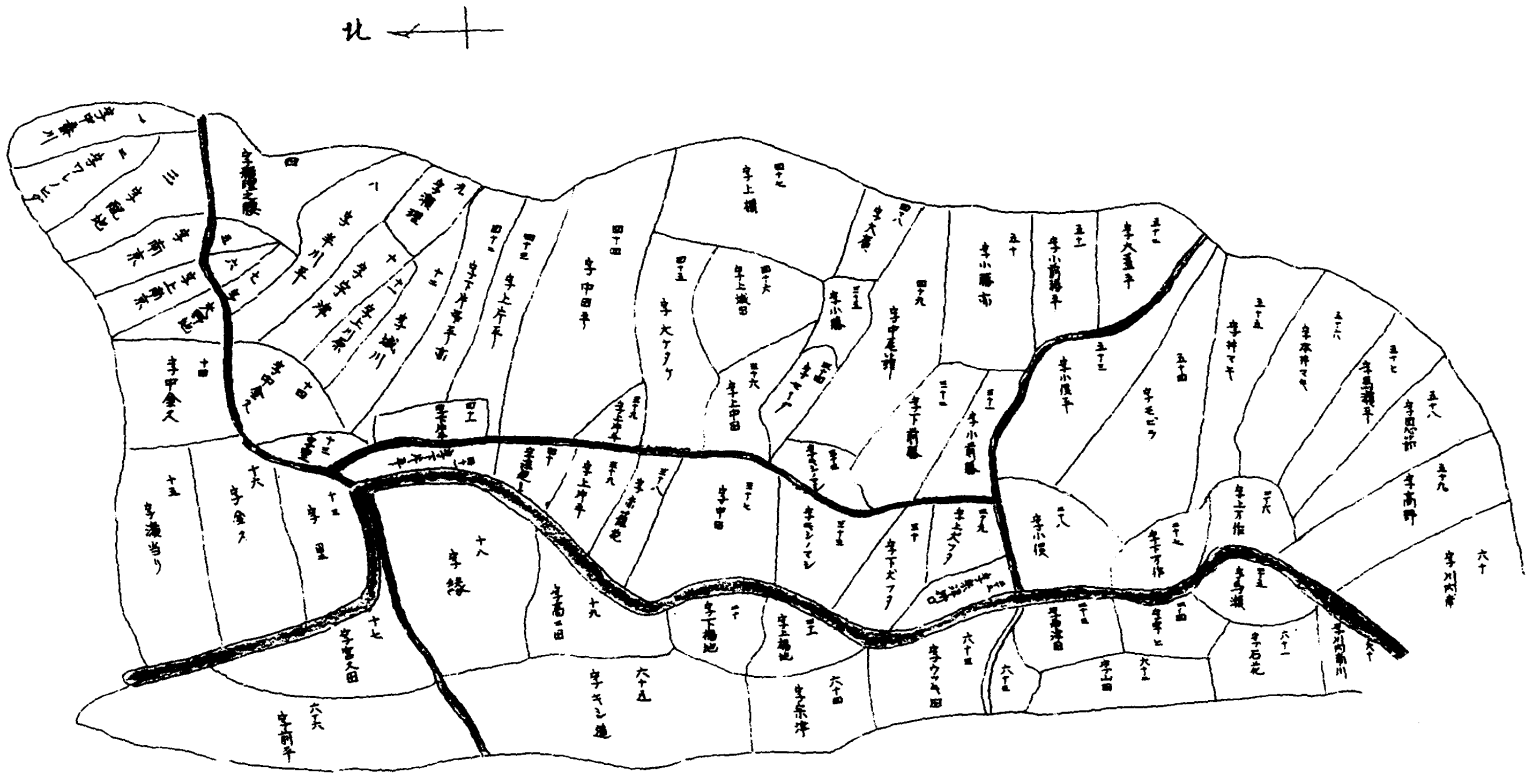
「住吉」は，その方言自体の内部変容による，古層崩壊の現象であるが，他（多くの現代呼称の地名）は，すべて外圧，すなわち共通語形の侵入による変容命名である。

〔図三〕は，大島本島の北部，東経129度35分，北緯28度25分に位置する，龍郷町嘉渡〔Ka do〕の集落図である。

「嘉渡のシマ（集落）は，大昔から豊かな部落で，港にも恵まれ，機帆船のころは，さまざまな船が出入りしし，常に活気に満ちたシマであったという」[16)]

集落名は，「良い港で，大洋に通じるという意味と，「議論百出して，議決まで言い争うほどに熱中する角立ての地」という説がある。いずれも古老達の話であるが，しかし「衆議一決後は，一致団結して，邁進する気風があり，その名残としての，家並や墓場がある」という。物質・文化の入り口としての「門口」の意味も存在するように思える。

「町役場（浦）より北側に八キロ，外場地区と呼ばれる一角にある。東に円部落，西に幾里部落の中間にあって，東南に長雲連峰を仰ぎ，越ゆれば龍郷に通じる旧道がある。―中略―南は瀬留方面に通じる旧道があって，西側の前平山は百メートル足らずの山である。この山を通る旧道の峠に，首切り馬が出るという場所がある。そこを通りアガレを抜けると，広い田んぼを眺めながら，秋名部落を通り，里部落を経て，芦花部の川上から名瀬に通じる旧道があった。―中略―北側は洋々たる東シナ海に臨み，サンゴ礁のリーフの内側には，トビス石が千古の歴史を秘めて雄々しく荒波に立ち向かっており，シマの人たちのシンボルとして親しまれている」さらに同書には，「嘉渡の海岸は，幅二十メートルぐらいの真っ白な砂浜が，塩浜からナトマリまで続いていた。真白な砂浜の内側には，防風林のアダンの木が幾重にもかさなり，自然の脅威からシマの人たちを守る城壁の役目を果たしていた。アダンの林と砂浜の間は約五メートルほどに昼顔の花，


北
字甲倉久
字海当り
字金久
字里
字緣
字宮大田
字前平
字高田
字キン地
字上坪
字中田
字大ケノケ
字上城田
字上中田
字下梅地
字上梅地
字東坪
字上横
字中長坪
字下前畠
字小前畠
字小藤市
字小藤
字小俣
字上大ノフ
字下大ノフ
字クヤ入田
字上オ作
字下オ作
字馬瀬
字石花
字山田
字高野
字川向原
字川向川

図三　嘉渡字図

の「緒言」で「私の師達の，すべての音を発音通りに表記せよという忠告はもっともであるが，そうするには，音に対応する文字がないことや，その他いくつかの理由から，全く不可能である」[12] と書いている。

地名は，人名が人格を持っているのと同じように，その地名の示す地域が他の地域とは異なるという地域格を持っている。従って本来的に，人名と同じような属性観念の強い固有名詞なので，保守性が強い。しかし一方，他の音声言語と同じように，その地域の社会構造，政治形態，価値観の変化という内部構造のゆれによって，さらには，外部からの，特には文化度の高い地域言語からの外的圧力―心理的圧力―によって，その語形が左右，変遷するものでもある。

地名の命名とその表記について，『続日本紀巻第六』の「元明天皇の和銅6年5月」（西暦713年）に，次のような記事がある。

「5月甲子，畿内と七道との諸国の郡・郷の名は，好き字を着けしむ。その郡の内に生れる，銀・銅・彩色・草・木・禽・獣・魚・虫等の物は，具に色目を録し，土地の沃堉，山川原野の名号の所由，また，古老の相伝ふる旧聞・異事は，史籍に載して言上せしむ」[13] とあるように，奄美大島の地名の表記も，『続日本紀』と同じような，古老の伝える旧聞を本に，書き手の好きな文字で表記されている。二字熟語の，しかも書き手の好みにも左右された―ときには同一の誤字や宛字が使用されている―行き過ぎの面でもあるが，既述の「音に対応する文字がない」という，琉球方言と同じく奄美大島方言の特殊性から，やむをえないことでもあったといえよう。

既に発表[14] したことではあるが，本島北部の集落「瀬留」の古形は〔sï rï bï〕または〔sje rï bu〕である。「瀬留」の地名表記も「瀬花留部」「瀬計留部」「瀬華留部」と，書き手の趣味的な文字が使用されている。

また，沖永良部島の「瀬利覚」を私の調査では〔zji q tʃa ku〕と記したが[14]，文献[15] には「ジッキョ」と記している。また，「黒貫」も，〔ku ru nu ▾ k〕であったが，同書には「クヌギ」と記している。地名呼称のゆれであろう。

以下，この島の住人達の語形と，現代の他島住民の共通語的語形を，二・三示すことにする。

前者が（注15）の記録で，後者が（注1）の記録である。

「アシキュラ」「芦清良（あしきょら）」，「ヒョウ」が前者の一般的呼称であって，どうしても地域を分割命名しなければならないときに，「ウイビョウ」「シムビョウ」と区分呼称する。

そもそも「ヒョウ」は「標のつくし」すなわち「標示」に由来し，傾斜地という地形・地勢を示している。これを後者は，「上平川（かみひらかわ）」「下平川（しもひらかわ）」と記している。前者では，「ウィビョウ」「シムビョウ」と区分けをしない住民は，既述のように「ウイビョウ」を「ヒョウ」，「シムビョウ」を

複雑な様相を帯びている。

一つの島の方言が，他の島の人には通用し難い，ときには同じ島内でも，各集落間で理解し難いという，島ごと，集落ごとにさえ分化した，小方言群である。

図二は，琉球方言の区画図である。[10)]

Ⅲ

地名は，人名とともに地域言語の最も古い姿である。がそれを記録として残す為には，その地域言語を表記する為の文字が必要である。

日本語は自国語を表記する為の文字を持っていなかった。異国の文化，異国の文字である漢字を移入し，その漢字の音や訓や義や形を，自国語の音や訓に当てはめ借用して仮名を発見し，今日の文字言語としたのである。しかし，漢字伝来の当初は，異質な言語文化の表記体系である漢文・漢字で，自国文化を表記するのには，表現の本質にも関わる様々な困難性が存在したことを，国語・国文学の最も古い文献『古事記』の序文に，記録者太安万呂が次のように記している。

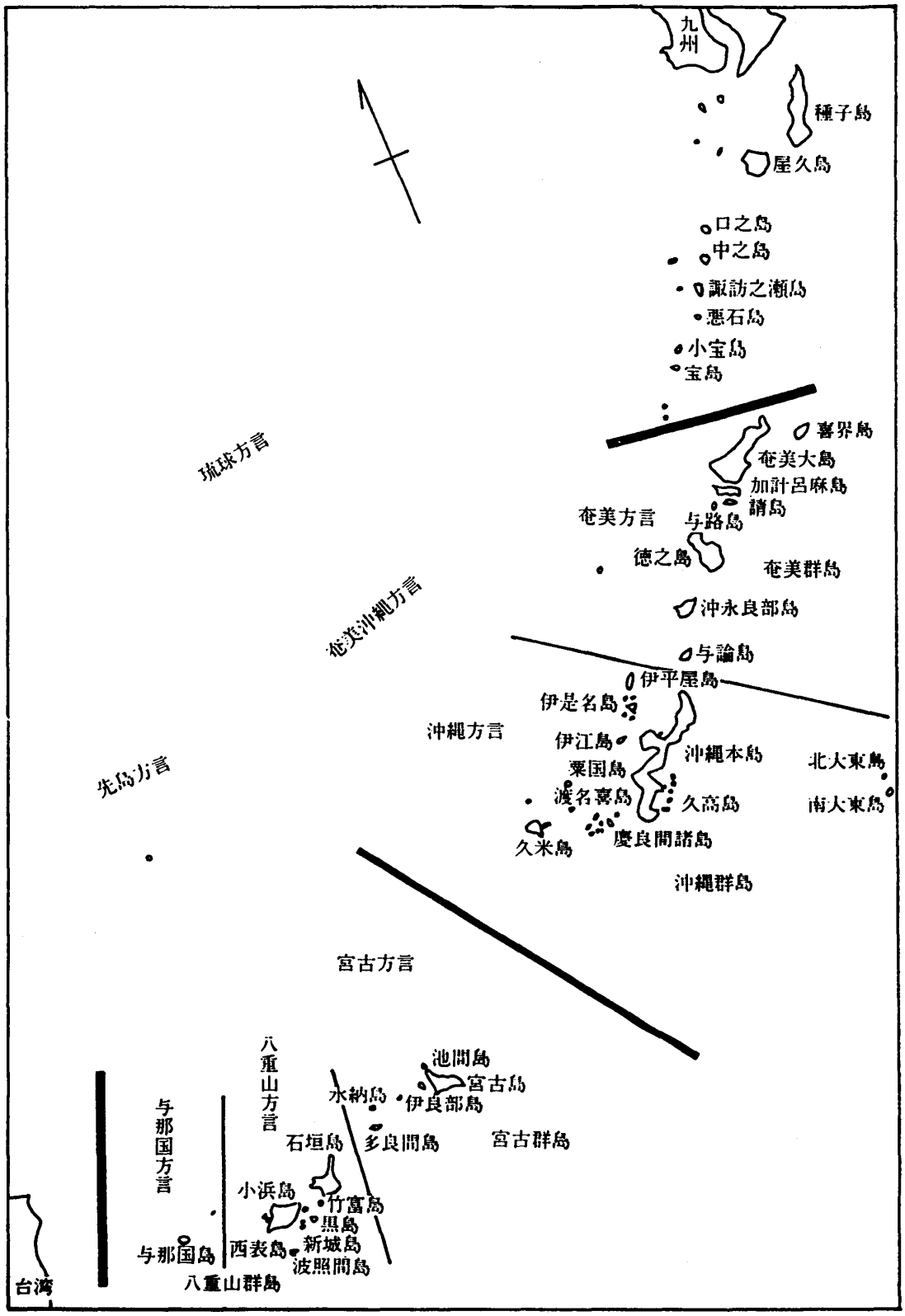
「臣安万呂に詔りして，稗田阿礼の誦む所の勅語の旧辞を撰録して献上らしむといへれば，謹みて詔旨の随に，子細に採り摭ひぬ。然れども，上古の時，言意(ことばこころ)並びに朴(すなほ)にして，文を敷き句を構ふること，字に於きて即ち難し，已に訓に因りて述べたるは詞心に逮ばず，全く音を以ちて連ねたるは，事の趣更に長し。是を以ちて今，或は一句の中に，音訓を交へ用ゐ，或は一事の内に，全く訓を以ちて録しぬ」[11)]

とあるように，「言意(ことばこころ)」の素直な，今日の日本語の中で最も軟かく，音(おと)の美しい倭詞(やまとことば)＝和語＝日本本来のことばで表現できなかったもどかしさ，いかばかりであったろうか，想像するに難くない。

この安万呂と同じように「詞心に及ばず」の心は，21世紀を真近に控えた今日でも，琉球・奄美方言の文字言語化にはつきまとっている。

共通語使用地域を除けば，多かれ少なかれその質や差の違いはあっても，地域言語の文字化には必ず付いてまわることではあるが，琉球・奄美の音声言語を文字言語化することは格別の困難さがある。それは，奄美大島方言音の中舌母音，さらには音韻論的な対立構造を示す有気音・無気音，そして喉頭化音の存在である。

西暦1846年５月から1854年７月の８年２ケ月の間，沖縄に滞在し，キリスト教伝道に携ったイギリス海軍琉球伝道会宣教師Ｂ．Ｊ．ベッテルハイムも，その著「琉球語と日本語の文法の要綱」


九州
種子島
屋久島
口之島
中之島
諏訪之瀬島
悪石島
小宝島
宝島
琉球方言
喜界島
奄美大島
加計呂麻島
請島
奄美方言
与路島
徳之島
奄美群島
奄美沖縄方言
沖永良部島
与論島
伊平屋島
伊是名島
沖縄方言
伊江島
沖縄本島
北大東島
粟国島
先島方言
渡名喜島
久高島
南大東島
久米島
慶良間諸島
沖縄群島
宮古方言
八重山方言
池間島
宮古島
水納島
伊良部島
与那国方言
石垣島
多良間島
宮古群島
小浜島
竹富島
黒島
与那国島
西表島
新城島
波照間島
台湾
八重山群島

図二　琉球方言区画

支配下にあったという。

慶長14年（西暦1609年）の薩摩の琉球入りによって，奄美大島諸島は，薩摩藩に直属され，明治の廃藩置県を迎えるに至って，「鹿児島県大島郡」となる。

昭和10年代の半ばごろまで盛んに見受けられていた，南島・琉球・沖縄（沖縄本島の属島である久高島から来たということから，請島の島民は，この人達を〔ku da ka〕と呼んだ）周辺から2・3艘から多い集団で7・8艘の舟に分乗して（舟の名称を沖縄では〔sa ba ni〕，奄美では〔su ɤ bu nï〕という）2・30人から100人近くの漁師とその家族が，島から島へ，季節から季節へ，黒潮の流れによって変わる，よりよい漁場を求めて移動しつつ，漁場から漁場へと，漁民は獲れた魚貝を，島民は芋・味噌・野菜その他の生活必需品を，お互いに物々交換―もちろん金銭購入も―しながら暮らす漂民的漁民集団，ときには気に入った集落での定住もあったといわれている。この海人的集団との交流もあって，奄美大島諸島の言語は，様々に変化した語形が存在したであろう。この海人達が，日本列島に沿うように流れる暖流・黒潮に乗って，様々な文化・言語を交流させて来たものと思われる。

現代の漁師達もそうではあるが，昔の海人達は，人力だけではとても考えられないと思われるほど遠くの島々と往来していたようである。

廃藩置県後，奄美大島の行政は，種子島，屋久島を中心とするトカラ諸島とともに，鹿児島県に属する。しかし言語はその歴史的・文化的位置と地理的位置から，琉球文化・琉球方言圏に属する。従って奄美大島の言語文化は，基層的に琉球方言であって，琉球方言圏内の他の島々の言語文化と共通する要素を多分に持っている。

奄美大島方言を比較方言学的立場で観察すると，喜界島・沖永良部島・与論島の3島の方言は，沖縄方言的色彩が強く，大島本島・加計呂麻島・請島・与路島の方言は，薩摩・大隅方言的色彩が強い。この薩摩・大隅的方言文化と，沖縄方言的文化の接点が，徳之島方言にある。

奄美大島諸島の地形が，徳之島以北（たゞし喜界島を除く）と南部の島々に区分されることと関わっている。

奄美本島・加計呂麻島・請島・与路島の方言は，基層的に琉球方言圏内であり，琉球方言に属する琉球方言的色彩の強い徳之島伊仙町方言以南（喜界島を含む）の，奄美大島諸島各方言と共通する要素を色濃く持っていながら，地理的・距離的に近い，薩摩・大隅地方の文化，言語の歴史性・政治性が関与して，この地の文化・言語に影響を及ぼしたものと推定される。その上に奄美大島の方言は，琉球方言圏内の他の島々とともに，海上に，しかも広い地域に散在するという，島嶼性の強い特殊な閉鎖性を持った言語環境のために，日本本土の方言では見ることの出来ない

大和朝廷では，多祢・掖玖の調査さえも行っている。この2島と比較して，阿麻見とは疎遠であったといえよう。

記載の順序も，九州本土の薩摩・大隅に近い順に記されている。

島の大小からすれば奄美大島本島は，日本の離島の中で佐渡が島に次ぐ2番目に大きく広い島であるといわれているが，その地形・地勢上から生産性は低く，産物も少ないといわれている。さらに九州の本土から阿麻祢にたどり着く為には，海を渡るしかないが，その海路が容易ではない。掖玖を過ぎてトカラ列島周辺に到ると，俗にいわれている海路の難所「七島灘」がある。潮の流れが速く，波の高い所である。そして阿麻祢の島々は，黒潮に囲まれ，太平洋の波に洗われた孤立無縁，島嶼性の，特異な自然環境下に散在する島々である。その特異な自然環境から，そこはまた，多祢・掖玖とはおのずと違った政治風土が，存在したのではなかったろうか。この政治風土が，大和朝廷と疎遠であった大きな要素でもあったと想像するのである。

奄美大島諸島の歴史は，原始時代から8・9世紀ごろまでを〔ʔa ma n ju〕「奄美世」，〔ʔa ma mi kju〕「阿麻弥姑」の世と称されている。

その政治形態は不明だが，恐らくオセアニヤ地域のパプア・ニュギニヤに見られる部族集団と同じような，長老者合議による，島毎・集落毎の素朴な祭政一致の行政組織であった。〔no ro〕や〔ju ta〕の意見も採り入れながらの，階級社会以前の集落共同体であったろうと推定する。〔ma kjo〕〔ʔa ma mi kju〕の活躍する時代であったであろう。

続いて〔ʔa zji〕「按司」という首長的存在が，武力によるのではなく，長老者合議によって選びだされた〔ʔa zji ju〕「按司世」が現われる。

この「按司」は，奄美大島本島の属島である請島，与路島の方言に，〔ʔa zja sju〕「按司主」という古層語形にその名残りを留めている。

これに続いて現われるのが，琉球国に統一される琉球王の世である。

琉球王時代の行政区画を代表するのが，「間切」である。奄美大島本島とその属島は，「七間切」，喜界島を「五間切」，徳之島を「3間切」にして，統治している。

この間切の区画は，奄美大島方言の区画と大いにからまるものをもっていて，次の薩摩の藩政時代にも，利用・応用され，その中核部分は次の廃藩置県まで，この間切が生きている。

「17世紀前半には，琉球に服属していたという古文書が，古琉球時代大熊（現龍郷町大字大熊）に〔no ro〕（祝女）の家から見つかった」[9]

それによると「間切」毎の〔no ro〕を統率する『大はむしゃがなし』すなわち『大阿母加那志』それは『御印加那志』と同一人物であったということから，このころの奄美大島は古琉球の

る「時代とともに変わる歴史への表層意識」である。本書が世に出た昭和24年という年は，種子島，屋久島は鹿児島県に，奄美大島諸島は占領地としての北部南西諸島群政府にと，日本本土から切り離されたために，島民は必死になって日本復帰を望んでいた年である。奄美大島諸島が置かれていた当時の，社会情勢，島民の心情が，奄美出身者であった著者の想いとなって，現われたものであったと理解される。

「あまみ」（海見・阿麻弥）が，日本の文献に現われるのは『日本書紀』からである。

「3年の秋7月丁亥の朔己丑に覩貨邏国の男2人，女4人，筑紫に漂ひ泊れり。言さく『臣等，初め海見嶋に漂ひ泊れり』とまうす。乃ち驛を以て召す』[5]

すなわち，「3年（齊明3年・西暦655年）の7月（文月）に，覩貨邏（①西域の吐火羅，即ちウズベック共和国あたりの国，②九州の南の吐噶喇諸島，③ビルマのイラワジ河の中流の驛国，と異説があって定まっていない）の国の男2人と女4人が，筑紫（九州）に漂着して来た。この者達の言うことには，最初に漂着したのは海見という島であったと，そこで直ちに驛をもって（都に）召した」[6]とある。

そして，同書『巻第二十九』「天武天皇の条」（天武10年の7月・西暦682年）には，「丙辰に，多祢人・掖玖人・阿麻弥人に禄を賜ふ各差有り」[7]とあることから，阿麻弥の住民が大和朝廷と往来したのは，このころからである。

前述の海見の島を経由して筑紫に漂着した覩貨邏人は，これより先の孝徳天皇白雉5年4月（西暦654年）の「夏4月，吐火羅国男2人・女2人・舎衛女1人・風に被ひて日向に流れ来れり」[8]ともある。

地理的には奄美大島より北（本土・九州に近い）に位置する種子島・屋久島の住民については，推古天皇24年（西暦616年）3月に，「掖久人3口，帰化けり」「夏5月に夜勾人7口，来けり」「秋7月に亦掖玖人20口，来けり，先後并せて30人。皆朴井に安置らしむ」，そして舒明天皇元年（西暦629年）「夏4月の辛未の朔に，田部連名を闕せり。を掖玖に遣す」，同3年「春2月の辛卯の朔庚子に，掖玖人帰化り」。さらに天武天皇6年（西暦677年）には「多祢嶋人等に飛鳥寺の西に槻の下に饗たまふ」。そしてまた，天武8年（西暦679年）の「11月己亥に，大乙下倭馬飼部造連を大使とし，小乙下上寸主光父を小使として，多祢嶋に遣す」。そしてこの使い「多祢国の図に貢れ」て，「同年9月飛鳥寺の西の河辺に饗たまふ」とあり，さらに持統天皇9年（西暦695年）には，「庚午に務廣貳文忌寸博勢，進廣参下譯語諸田等を多祢に遣して蠻の所居を求めしむ」等々あるように，多祢・掖玖と本土・大和朝廷とは，頻繁にといってよいほどの往来がなされている。

昭和30年の人口　奄美大島全域で205,363人，昭和40年が183,471人，昭和50年が155,879人，昭和60年が153,062人，平成２年が142,834人，平成７年が既述の通り135,754人と，年を追うごとに減少の一途である。

喜界島，徳之島，沖永良部島，与論島などでは半減以上の過疎である。後述する瀬戸内町請島の請阿室部落は，昭和30年に599人住んでいたのが，平成７年には136人でしかない。離島の過疎化現象は甚だしいというべきであろう。

II

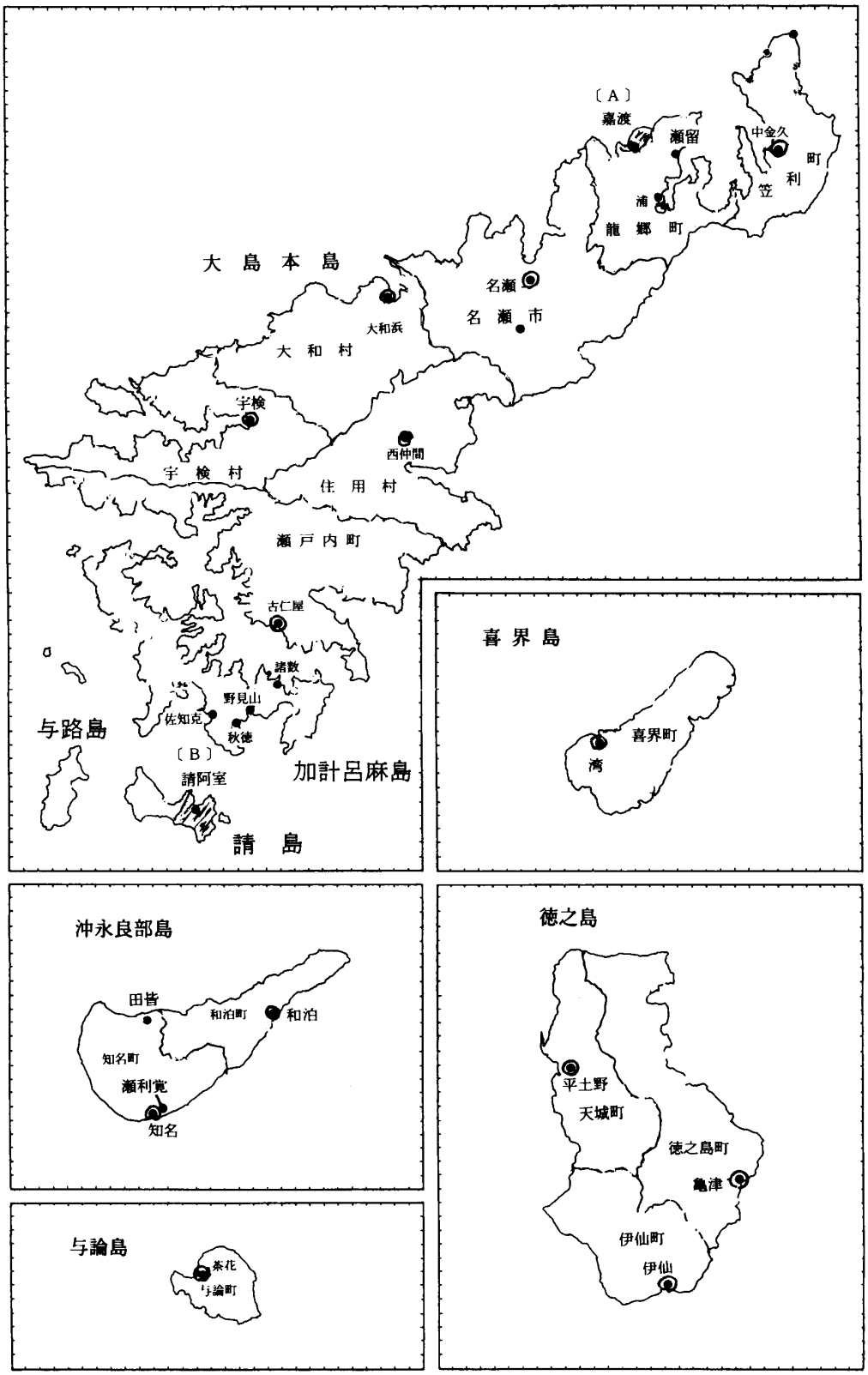
「琉球列島の島々の成立は，日本列島にくらべて古い。日本列島では第四期の終りごろ，ほぼ２万年前のウルム氷期の最後の寒冷期まで大陸と地続きであり，動物や人類も往来していた。ところが琉球列島が日本列島や大陸と離れて孤立したのは第四期のなかごろ，ほぼ数10万年前だろうと考えられている。だから，島々の成立によって生物群が隔離された時間が日本列島より一桁も古い。したがって遺存種や固有亜種が多いのだと考えることもできる。―中略―その孤立性，つまり島嶼性とよくいわれる地理的状況と南方的熱帯的という地形・生態学的特性が琉球の特異な自然環境をつくりあげている」[2)]

と，琉球文化圏内に存在する奄美大島諸島の成立や動植物の分布は，鹿児島県―いわゆる日本本土―よりも沖縄県―いわゆる琉球列島―に近いものであるということを述べ，さらに同書で，「歴史の表層を流れる意識は時代とともに変わっていくとしても，その基底にあるのは動かしがたい自然環境である」（245頁）とも述べている。

また，南島の人々が海上の道として利用したであろう親潮・暖流黒潮の流れの北上は，これよりもさらに古く，「1600万年前，インドネシア諸島が赤道海流をせき止めてできた」[3)] ものであるという。

一方，「薩摩・大隅の南端から台湾の東海に亘って，いくつかの弧を描いて，飛石の如く点々と並ぶ大小50有余の島々は，これを総括して一般的に南島と呼び，学術的には吐噶喇列島・奄美列島・琉球列島の３列島に区分されてゐるが，古文献に徴するに，昔時はこれ等の島々を総称して多禰，又は掖玖といった。だから古史に多禰の国又は掖玖の国と書いてあるのは，現今の種子島又は屋久島を指したのでもなく，一般に汎く南島を総称したものであるから，わが奄美諸島も古くは多禰又は掖玖又は夷州と称へられたことを記憶しなければならぬ」[4)] という。

注４の「奄美諸島も古くは多禰又は掖玖と称へられた」とあるのは，注２の文献に示されてい


〔A〕
嘉渡
瀬留
中金久
町
利
笠
浦
龍郷町
大島本島
名瀬
名瀬市
大和浜
大和村
宇検
西仲間
宇検村
住用村
瀬戸内町
古仁屋
諸数
野見山
佐知克
秋徳
与路島
〔B〕
請阿室
加計呂麻島
請島
喜界島
喜界町
湾
沖永良部島
田皆
和泊町
和泊
知名町
瀬利覚
知名
徳之島
平土野
天城町
徳之島町
亀津
伊仙町
伊仙
与論島
茶花
与論町

図一　奄美大島諸島

奄美大島方言の研究

――地名呼称の古層を求めて――

春　日　正　三

I

奄美大島諸島は，東経130度02分から128度34分，北緯28度31分から27度01分，経度・緯度ともに約２度，北端から南端までの直線距離約250粁の海上に，飛石のように連っている島々である。

北から南に，喜界島・大島本島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島の，人の住む大小８個の島である。(図一)

図一は，経度・緯度を示してはいないが，大きさは島それぞれの広さを示している。◉の地点が，現代の行政組織１市10町３村の役場の所在地である。

奄美大島諸島の総面積は，1230.96平方粁で，最も大きい大島本島が712.02平方粁，最も小さい与路島が9.3平方粁である。

以下図一の順にその広さを示すと，喜界島が56.87平方粁，加計呂麻島が77.38平方粁，請島が13.34平方粁，徳之島が247.89平方粁，沖永良部島が93.63平方粁，与論島が20.48平方粁である。

地形上からは，「本群島は二分され，大島本島，徳之島は主として古成層とこれを貫く火成岩からなる急峻な山陵性の地形で，海岸線は変化に富み，河川はいずれも短小急流を呈している。他の３島は琉球石灰岩，いわゆる珊瑚礁が広く発達し，低平な段丘状の地形で砂浜，鍾乳洞等観光的資源には恵まれている反面，河川は少なく，雨水は大部分地下に浸透している」[1)]

ここに記されていない加計呂麻島・請島・与路島は，前者に属し，この５島は琉球独特の毒蛇「ハブ」の棲息地である。従って後者の３島に「ハブ」はいない。

人口総数は，平成７年12月の調査で，135,754人であるという。

私の少年のころ歌っていた，地域の高等小学校の応援歌では，「20有余万」と歌っていた。昭和24年12月31日の奄美群島政府の調査では，226,752人であったという。